

# 『チェンチ家』におけるシェリーのベアトリーチェ

——特に彼の悲劇の概念との関連において——

高 橋 規 矩

## I

『チェンチ家』はシェリーが上演を目指し、大衆の評判を顧慮して書いた作品だけあって<sup>(1)</sup>、著者の生存中、彼の作品の中で最も人気があり、その最大の作品と言われた。シェリー自身は、この作品よりも『プロミュークス解縛』の方をすぐれたものと考えているが、また、当時の茶番劇やメロドラマを好む風潮のためこの劇の上演は拒絶されたが、ワーゾウスは「当代の最大の悲劇」と見做し、メアリー・シェリーも夫の作品中最大の傑作と考えた。近年でも、F. R. リーヴィス<sup>(2)</sup>の如き意地悪い批評家を除けば、シェリーの研究家の多くは、この作品がシェリーの傑作の一つであると認めることに異論はないようである。

所が、一度、女主人公ベアトリーチェの性格の取り扱いということになると、この劇の最初の部分と最後の第五幕との間において、シェリーの意図が不統一、曖昧、無慈悲であるという、更には、一般的悲劇の概念からすれば、ベアトリーチェは悲劇的人物ではないという非難さえ述べられるのである<sup>(3)</sup>。この論文では、シェリー独自の悲劇の概念と『チェンチ家』の主題の内容を明らかにし、その実際の適用を問題とし、女主人公ベアトリーチェが対決しなければならなかった社会的・家庭的暴虐と欺瞞と、これに対処するベアトリーチェの性格の展開をあとづけて、シェリーの所謂「悲劇の人物」としてのベアトリーチェの取り扱いに対する困難さがどこにあるかを明示したいと思う。

## II

シェリーは1819年3月から4月の間に「道徳的にすぐれた美しい理想主義」<sup>(4)</sup>を扱った『プロミュークス解縛』の第二・第三幕を完成すると、直ちに5月14日には「悲しい現実」<sup>(5)</sup>を主題とする『チェンチ家』に向ったのである。その間、メアリーとの間の子供ウィリアムが死んだ6月7日前後の中断の時期があり、実質的には、シェリーによれば、2カ月を費して、劇は8月8日に完成されたのである。『プロミュークス』では、シェリーは抒情的精神の流露するがままに身を委ね、『チェンチ家』では、上演を目的とし、大衆の理解の側に立つて、自分の感情を抑え、奔放な心象を避け、日常語を用いるなど、短時日における作者の天才のこのような多様性には誰しも驚嘆せざるを得ない。

## III

では、シェリーの悲劇の概念と『チェンチ家』の主題とはどのような内容をもつたものであろうか。この悲劇の主題をなしている要素として数えられるものに、〔1〕「家庭的・政治的暴虐と欺瞞への忍耐強い、和解しない敵意」<sup>(6)</sup>、乃至、反抗、〔2〕「倫理的誤謬」<sup>(7)</sup>と〔3〕

「インセスト」（近親相姦）の三つがある。この中で、この劇の基礎をなし、劇を真に悲劇としているものは、シエリー自身が言っているように、〔2〕の「倫理的誤謬」である。というのは、〔1〕と〔3〕とは、既にシエリーは他の作品において経験したものであって、必ずしも悲劇的結末を伴ってはいないからである。

〔1〕について、シエリーは、『チェンチ家』につけた友人 L. ハントへの『献辞』で、自分は「家庭的・政治的暴虐と欺瞞への忍耐強い、和解しない敵意」に身を捧げたいと述べているように、この劇においても、圧迫者に対する被圧迫者の反抗という、シエリーの詩の多くの特徴となつている共通のテーマが期待される。この時期でも、シエリーの政治的な関心は一向に衰えを見せず、彼は、マンチェスター大虐殺事件（ピータールー）に取材した詩『無政府の仮面』を書いたり、11月6日には、当時の不穏な政治的・社会的情勢に刺戟されて、「政治という大砂漠の横断の旅をするために文学の芳香ある花園を棄てた」<sup>(8)</sup>と宣言して、政治論文『哲学的改革案』を書いた。

所で、この圧迫者と被圧迫者、或は、これらが夫々代表する二つの勢力、陣営の間の不和を解決する、被圧迫者側がとり得る方法として、次の四通りが考えられる。即ち、①和解、②逃亡、③敵を、愛と平和、忍耐と許しにより説得し改心させること、④憎悪と復讐とによって、自殺または他殺を選ぶ道などである。しかし①の和解については、『プロミーシュース』の『序文』にあるように、シエリーは「この戦士（プロミーシュース）と人類の圧迫者との和解というような弱々しい結末を好まなかった」<sup>(9)</sup>のである。②の逃亡についても、姉のてつを踏まないようにと、チェンチ伯の監視の眼はベアトリーチェには一段と厳しく、また、彼女の側としても、継母ルクレチアと弟ベルナルドを庇う必要から（I. ii, 16-9）不可能である。③の最も好ましい忍耐と許しによるプロミーシュース的方法、「道徳的にすぐれた美しい理想主義」でもってする方法をとることは劇が悲劇たるためには不都合である。一つには、史実から、今一つには、劇を悲劇たらしめるために、ベアトリーチェが選ぶべく残された方法は、自殺か、或は、父親殺し以外にはなかつたのである。ルクレチアが言うように、「考えてみれば、死ぬことだけがわたしたちを解放してくれるのよ。／父の死か、わたしたちの死かが。」（III. i. 78-9）ベアトリーチェは、「自殺」は宗教上から自分を自由にする手だてではないとみて思いとどまった（III. i. 132-4, 148-51）。彼女は、オルシーノーの巧みな奸計によって、父親殺しを選びその首謀者となった。つまり、シエリーの見方からすれば、このようにして、ベアトリーチェは「倫理的誤謬」を犯して「悲劇の人物」となったのである。

次に、主題の〔2〕の構成要素たる「倫理的誤謬」について考察してみよう。シエリーは、C. ベイカーが指摘するように<sup>(10)</sup>、悲劇は倫理的な醜状に存すると考えている。逆に言えば、プロミーシュースの選んだような、道徳的にすぐれた理想的な行為からは、悲劇は生じないのである。シエリーは、『チェンチ家』の悲劇の主題の基礎をなしているものは、「倫理的誤謬」であると言っている。この「誤謬」を犯した者は、チェンチ伯ではなくて、父の暴虐の犠牲者である娘ベアトリーチェであることが『チェンチ家』につけた『序文』で明らかである。「言う迄もなく、如何なる人間も他人の行為によって真に恥かしめられはしない。そして、最も無法な迫害に対する適切なる報応は、親切心と忍耐心と、迫害者の邪悪な激情を平和と愛の力で改心させようとする決心である。復讐・返報・贖罪などは有害な誤りである。ベアトリーチェがもしこのように考えたとしたら、もっと賢明善良であったであろう

う。しかし、悲劇の人物には決してならなかったであろう<sup>(11)</sup>。」事実、犯行の数分後に法皇の特使サヴェルラはチェンチ伯の逮捕状をもってかけつける。もし、彼女が早まらなかったら、彼女は自由・無罪・潔白であったであろう。

困難さは、C. ペイカーが述べているように<sup>(12)</sup>、シエリーが彼独自の倫理観を上述のように、彼の悲劇の概念、或は、主題の内に、取り入れたことである。ベアトリーチェは、シエリーにとって、若くて美しく、純潔で、優しい、実に称賛すべき人物であるにも拘らず、彼女を「悲劇の人物」とするためには、シエリーの倫理において最も卑劣な手段である復讐と殺人の行為——彼の所謂「倫理的誤謬」——をさせなくてはならなかったのである。この困難さを、シエリーは別の所で、彼女の選んだ不徳の行為は単なる仮りの衣裳のようなものであり、これによって彼女の「内なる本性の美」は決してけがされることがないが故に、かかる行為、乃至、振舞いにも拘らず彼女は称賛さるべきであると解釈することによって解決したようである。即ち、『チェンチ家』の『序文』で、シエリーは、「ベアトリーチェ・チェンチは、活動力と優雅とが相互に損うことなく共存している稀にみる人間の一人であったようであり、その性格は単純であり、また、深刻であった。彼女が主演者であり、また、被害者でもあった犯罪と悲惨事は、社会という舞台で彼女が演じるために、環境が彼女に与えた仮面と被覆のようなものである<sup>(13)</sup>。」と述べ、彼女の本性への称賛の言葉を惜しまない。

最後に、シエリーがこの悲劇の主題に、〔3〕「インセスト」を導入したのは何故であったか、を調べてみよう。確かに史実ではそうになっているが、シエリーは既に『レイオンとシスナ』(1817)、「ロザリンドとヘレン」(1817)で同様の主題を扱っていることに注目しなければならない。また、当時の作家たち、例えば、バイロン、ゴドウィン、ルース、ハントなどもインセストを扱っている。シエリーは、1819年11月16日付の手紙で、「インセストは、他の多くの間違った事柄と同じように、非常に詩的な題材である。それは、愛情の過度か憎悪の過度かのいずれかである。それは、最高の英雄的な行為の栄光に身をつつむもののために、他のすべてのものを無視するものであるか、或は、利己主義と嫌悪に耽ける目的のために、思想の内にある善と悪の観念を混同し、これら観念を無視する冷笑的な憤怒であるかのいずれかである<sup>(14)</sup>」と言っている。もしも、詩的效果を更に高めるためにインセストが用いられたとするならば、愛情の過度によって英雄的行為をなす例は、『レイオンとシスナ』における兄と妹との関係に認められ、憎悪の過度による例が、『チェンチ家』の父と娘との関係に見出されるであろう。そして、後者においては、インセストによって、父と娘との憎悪によってつくられた疎遠——「地獄の深淵」(“the gulf of Hell,” IV. i. 98-9)——は更に深められることになり、悲劇は一層深刻にして決定的なものとなったのである。従って、E. ダウデンが、その名著『シエリー伝』で、『チェンチ家』は「異常な肉欲の悲劇と言うよりは途方もなく異常な憎悪の悲劇である。二人の人間を極めて神聖な平等な結合へと導びくべき行為が恐ろしい逆転によって、暴君の悪意の無上の業、即ち、最も深い嫌悪、及び、最も致命的な疎遠の地盤となった<sup>(15)</sup>。」と書いているのは極めて妥当な意見と言えよう。

#### IV

上述のような悲劇の概念とその主題の上に立って、シエリーは、「多分、描写されている人物が実際にこうであったと思われるような人物の性格の公平なる展開に特に注意を払い、

自分の他の作品の特徴となっている特殊な感情や思想を排除して書いた」<sup>(16)</sup>と考えられる。次に、美貌にして、純潔なベアトリーチェをめぐる主要な人物たち、「家庭的・政治的暴虐と欺瞞」の実例として法皇クレメント八世とチエンチ伯爵の性格を、それから、ベアトリーチェをも含めたチエンチ家を悲劇へとおとし入れた狡猾にして人一倍世俗的な教会長オルシーノの策略を見、最後にこれらのものに対して女主人公が「悲劇の人物」として如何に対処し性格を展開させていったかを辿ってみよう。

### 〔1〕 法皇と政治的・宗教的腐敗

我々は、慣習・法律・制度の腐敗や悪弊の化身をチエンチ伯よりも寧ろ法皇クレメント八世に求めるべきである。法皇は劇には一度も登場しないが、枢機官カミーローなどによって彼の言葉は屢々伝えられるので登場人物と見做されている。シエリーは、法皇を始めとするイタリアのカトリックを非難の眼をもって描いている<sup>(17)</sup>。そして、法皇権とチエンチ伯との不正な取引は、劇につけた『序文』で次のように激しく攻撃されている。チエンチ伯は「その生涯の間に幾度となく、彼の法外で言語に絶する重大犯罪に対して、十万クランで法皇から免訴を購っていた。それ故この老人の被害者たちの死刑は、正義愛によるものという説明は殆んどなりたたないのである。法皇は多分厳格ということに対する他の真意に混って、チエンチ伯を殺すものは何人でも、法皇の確実で豊富な収入財源の宝庫を奪うものと考えたのであろう。」<sup>(18)</sup>

テキストの第一幕の初めにおいて、法皇は金の調達のためには、殺人犯さえも許す人物として描かれている。法皇は、教会の繁栄のために、チエンチ伯の「罪深い魂の地獄行きを猶予した」のである（I. i. 1-9）。また、彼は、チエンチ伯の不興をかうことは自分にとって不利と考えて、妻の持参金をまき上げられ、あまつさえ、困窮のどん底におとされた長兄デアコーモーの訴訟をも取り上げなかった（II. ii. 1-40）。更に、法皇は、父権に対する反抗は自分に対する反抗と同じものと見做し、

「父権というものは言わば法皇自身の反映なのだから  
何事においてもそれを弱めるということは、  
極めて危険になると考えておられるのです。」（II. ii. 54-6）

チエンチ伯も、彼と同じ考えで、ベアトリーチェをば「父と神の権威に反抗した者」ときめつけている（IV. i. 90）。

ベアトリーチェの見た法皇は、「残酷、冷淡、頑迷で、正義を口にしながら、／カインさながらの殺戮の行爲をする／人間」（V. iv. 107-9）、「頑なにして、冷酷な人間共」（V. iv. 112）の一人であった。横暴で不正なる父を殺したベアトリーチェ、ルクレチア、デアコーモーを寛大に扱う所か、法皇は、「この前代未聞の犯罪を、最も厳しい法律の／訴訟手続きによって是非を糾明するだけでなく、その上／犯人の処理を峻烈に行うよう」命じたのである（V. ii. 72-4）。赦免の嘆願書を引き裂いた彼は、「非情の姿であり、／儀礼であり、掟であり、慣習であって、人間ではないのです。」嘆願書をたずさえた弁護人に対する彼の苦い顔は、「自己の機械装置の運転方法」でもあるかのようであった（V. iv. 1-9）。

### 〔2〕 家庭的暴君としてのチエンチ伯爵

フランチェスコ・チエンチ伯と法皇との間の闇取引として劇の初めに述べられているように、政治的・宗教的暴虐と欺瞞は、そのまま家庭における暴虐と欺瞞と照応する。事実、法

皇自身の言葉によると、「父権というものは／言わば法皇自身の反映である。」とは言え、チエンチ伯の性格は、法皇の場合のように、社会的・政治的悪の権化とか、かかる悪しき環境が作り出したものと見るには、あまりにも複雑な人物である。彼の所業は、また、動機なき動機によって説明し尽されるものではない。D. キングヘリーも指摘するように<sup>(19)</sup>、チエンチ伯は、シエリーの以前の作品に見られるような、恐怖されるためにのみ作り出された類型的な人物ではなく、恐怖されるべき人間である。彼は憐憫を知らず、後悔もせず、ひたすら憎悪、復讐、呪咀に耽ける。チエンチ伯自身をして自らの本性を分析させてみよう。

「わしは、わし自身が人間のような気がしない。  
何か忘却された世界の罪業を  
罰する命令を受けた悪魔のような気がする。  
わしの血液は血管の隅々まで循環している。  
或る恐ろしい快樂がそれを刺戟していたださせている。  
一種玄妙な畏怖の念で目がくろめき胸苦しさを覚える。  
心臓は非道の喜びを待ち焦れて、  
鼓動している。」 (IV. i. 160-7)

シエリーが悪人を、女主人公の祖父でもなく、夫でもなく、兄でもなく、老いた父としたことは、史実にもよるが、彼なりの考えに従えば、その悪辣さを極端にするのに最も効果があったと思われる。何故なら、「どこからどこ迄も暴君らしい父親は、その父親という／神聖な名称のために、反ってそれだけ不埒なものでしょう」(II. ii. 80-1)とか、「威厳のある白髪の老人が、ふしだらな行為や／血なまぐさい所業をするのは格別忌わしく思えます／」(I. i. 38-9)と語られているからである。

チエンチ伯の動機は七大罪悪に数えられている「邪淫」・「貪欲」・「傲慢」よりなり立っている。彼は、劇の初めにおいて、自分の生涯の目標たるべきものを述べて、「わしが強健で富裕に、／傲慢で放埒(lust)に生活し、行末長く余命を楽しみ、云々」(I. i. 49-50)と語っている。また、枢機官カミーローの回想によると、チエンチ伯は、その「暴虐無道の青年時代」には「無法の生活」を送り、「無謀・無慈悲の壮年時代」を過ぎて、現在「年老いても尚自墮落な生活のために、おびただしい罪科を背負っている」のである(I. i. 49-55)。チエンチ伯自身も自分の歩んで来た人生について、これを「青年時代の敏捷な決断力、／壮年時代の苛酷な意志、そしてまた／老年時代の不動で冷酷で狡猾な悪行」(I. iii. 173-5)などという言葉で言及している。

チエンチ伯の動機を第一に特徴づけるものは抑え難き烈しい肉欲の衝動であって、そのために青年時代には婦女暴行の悪名が高かった。所が年老いて、この衝動が直ちに実行に移せなくなると、これは、他人に肉体的精神的苦痛を加えて、他人が苦悶するのを傍観する楽しみへと変っていった。これは、シエリーが勧める愛の倫理と対照的なものである。伯爵は次のように話す。

「人間は誰でも肉欲の快樂を喜び、  
復讐を楽しむものです。自分には少しも感じない苦悩を  
無精に喜び——他人が苦しみ悩むのを見て、  
自分が安泰であることに秘かに満足するものです。」

わしの楽しみは唯これだけです。  
苦悩の姿が他人のものであり、喜悅の感覚が  
わしのものであれば、それを見るのが好きです。」（I. i. 77-83）

「こんな気持が次第に高じて来て  
この頃では、わしの気紛れな妄想が  
その欲望を具体化し、あなたのような方に知らせたら  
仰天なさる程の恐ろしい陰謀を空想の中に造り上げている。」（I. i. 86-9）

彼は、青年時代と壮年時代での肉欲の歓楽がすぐさま実行によって味わえなくなった老年時代では、復讐によって他人の不幸を楽しむようになったのであった（I. i. 69-9）。

彼の第二の動機は、長子デアコーモーが言っているように、貪欲心である。彼は、「老いぼれの陰気な吝嗇漢」に外ならない（II. ii. 5）。彼は、自分の犯した犯罪の赦免のために、法皇に金と領土を与えていたために、自分の財産が次第に減少して行くのを気にしている。

また、今回の悪事の償いとして彼の「領土の三分の一」が失われんとしている（I. i. 126）。「老人の武器たる財宝が／この枯れ萎びた手から滑り落ちて行くわい。」（I. i. 127-8） それに加えて、咀わしい兄息子共のためにこれ迄の四倍の支給を支払うべく法皇から命じられている（I. i. 126, 129-30）。このようにして、チェンチ伯は、心から息子たちの死を願うようになり（I. i. 134; I. ii. 52-3）、長子デアコーモーからは妻の持参金を奮い（II. ii. 20-1）、デアコーモー一家の不和と困窮を見て冷笑し、満足する（III. i. 298-330）。

第三の動機として、彼には傲慢な気質があった。彼は憐みの心を知らぬ家庭的な暴君である。彼は「順境から自分の憎悪を嘲笑する」（IV. i. 25）者を憎み、自分の憎悪の犠牲となって苦悶する者を見て楽しむ。この傲慢の気質は貪欲心と結びつき、チェンチ伯は、スペインに送った二人の「反抗心の強い兄たち」（IV. i. 109）、ロッコとクリストファーノの死を喜び、大宴会を催した（I. iii. 43-4; 76-87）。

チェンチ伯における貪欲、こじれた肉欲と傲慢心とが結集して、娘ベアトリーチェに向った。彼は、居館から逃げ出し結婚し多額の持参金を取った姉のてつを踏ませぬようにと（II. i. 84-5; I. ii. 70; IV. i. 24-5）、ベアトリーチェを監禁した。そして、今や成人して、継母ルクレチアに代って、「保護神の如く」（II. i. 48）、継母と弟ベルナルドを庇おうとするベアトリーチェは、「化粧した毒蛇」、「けだもの」、「顔こそ綺麗だが恐ろしい奴」（I. iii. 165-6）である。こじれた肉欲と傲慢心は、チェンチ伯をして、娘に対して、インセストの行為へと導びいたのである。彼は、女性を屈服させる方法はその処女性を奪い辱しめることにあると見たからである。そして、インセストは、ここでは、最も極端な憎悪の詩的な場合としてあらわれたのである。彼は娘に対して、大宴会のすんだ夜の企てをもらす。「わしは、貴様を優しく穏やかにする魔法の秘儀を心得ておるぞ。」（I. iii. 167）「あの魔法の秘儀は心ゆく迄効目がある。／やらねばならぬ。やって見せるぞ、誓って／」（I. iii. 177-8）。

四方を濠と城壁で完全にめぐらした、曾って口に尽せぬ恐ろしい事件を外へもらしたことがない、アペニン山中のペトラ城へ一家を連れて行く彼の目的は、彼が貪欲と傲慢とこじれた肉欲からくる憎悪の限りを、主として、ベアトリーチェに向けるためであった。第四幕で城に到着したチェンチ伯が、自分の暗殺が目前にせまっていることも知らずに、家族の者た

ち、特に、ベアトリーチェに対して、最も畏怖すべき憎悪と呪咀を吐く場面は、最も劇的な効果と迫力がある所とされている。これはシエリーが最も力をいれて書いた所であり<sup>(20)</sup>、ゴネリルに対するリア王の呪咀を思い起させるものがある。

### 〔3〕 オルシーノーの策謀とベアトリーチェ

ベアトリーチェによって、「ずるくて曖昧な気質の方」(I. ii. 28)と呼ばれているオルシーノーは、史録ではクエルローという名の僧職にある男である。シエリーは、オルシーノーの名をシェイクスピアの『十二夜』の人物に見出したのかも知れない。

シエリーは教会長をずるい墮落した男として描くことによって、政治的・宗教的制度の腐敗が法皇から末端に迄及んでいることを示している。このイヤゴー的人物も決して動機なき人物ではない。彼はベアトリーチェへの片思いが高じて、「ベアトリーチェを絶対に逃さぬ畏の／わたしの恋の策略」(II. ii. 82-3)によって、彼女に父親殺しをさせ、恩を帰せ、「もっと割安で」彼女を入手せんと企んだ。「わしのことは、／報いらぬ恋の思いのために苦境に陥ったのです」(V. i. 61-2)と彼は自認している。「所でたとえチェンチが／殺されたとしても、それが何で罪なものか。」(II. ii. 120-1)とオルシーノーは一人うそぶく。「あの女の父が死ぬ。」(II. ii. 148)オルシーノーにとって、チェンチ伯の殺害は、ベアトリーチェを入手するのに二重の意味をもっていた。一つには、C. ベイカーが明らかにしたように<sup>(21)</sup>、彼は横暴な父親殺しを彼女にさせることによって彼女を意のままに出来ること、そして、今一つには、チェンチ伯が生きていては、たとえ彼が彼女の心を得たとしても彼女と結婚することは不可能だったからである。何故ならば、チェンチ伯は、逃亡し、法皇の親戚の者と結婚し、法皇の仲裁で相当の持参金を奪った姉のてつを踏まないようにと、彼女に対して常に極めて細心の注意を払うことを怠らなかったからである。

オルシーノーが目的を遂行するのに好都合なことが二つあった。即ち、先ず第一には、チェンチ家の者全体が不和の状態にあり、不満が絶えず、誰もがチェンチ伯の死を密かに願っていたことである。彼は語る。

「わしは以前とは状勢の変ったこの欺瞞の舞台で、  
真面目な喜劇を演じ、  
他の者たちが互に織り合う、  
善と悪との混じり合った計画を利用し、  
わし自身の特別の目的を達しようとするのだ。」 (V. i. 77-81)

第二には、オルシーノーによって発見され巧みに利用される所となった、チェンチ家の者たちに共通に認められる極めて危険な次の弱点があったことである。

「あの一家の人達は、自己の内心だけでなく、  
他人の心の底迄分析する習性があるのだが、  
幸にも、これがわしの秘密の腹案に全く好都合だ。  
こういう自己分析の結果は、意志の力に、危険な秘密を  
教えることになり、行動の力は、  
想像されるに違いない、実行される可能な事柄を知って、  
最も邪悪な陰謀の深みに陥るものなのだ。」 (II. ii. 107-13)

そして、チェンチ伯もこの陥穽に落ちたのだった。かくして、オルシーノーは、ベアトリーチェと継母ルクレチアには、父の横暴を訴えた法皇宛の嘆願書に対して偽りの返事をして二人を窮地に誘いこみ、娘を父親殺しの首犯たらしめ（Ⅲ. i. 172-7）、また、兄「デアコーモーの言葉から窺い知ったあの男の熱望を手掛りにして」（Ⅱ. ii. 145）、彼をも、陰謀の仲間に加えたのであった（Ⅲ. i. 336-90）。

オルシーノーのはりめぐらした策略の糸は、チェンチ伯のペトレラ城入城の夜をクライマックスとして、チェンチ家を悲劇の一点に引き寄せたのであった。彼は、優柔不断なるデアコーモーを励まして、「単に言葉だけでは、実のない笑いぐさに過ぎませんからね。／まあお聞きなさい。賢明な神は、それをよしとなさって、／ふさわしい懲罰の糸を一点に引き寄せておられますよ。／あなたが計画していることは、／言ってみれば、成就したも同然ですよ。」（Ⅲ. i. 342-6）と言う。如何に教会長の策略が巧妙であったかは、デアコーモーが事件のすんだ後彼に語った悔恨の言葉から知られる。「ああ、わたしは、あなたの柔和な、／好意ありげな顔の中に、わたしの最も邪悪な思想の／影を見つけねばよかったのに。あなたが、ほのめかしたり／尋ねたりして、わたしに恐ろしい観念を思いつかせ、／それが普通のことだに思えて、それを希望するように／仕向けなければよかったのに。」（Ⅴ. i. 19-24）

#### 〔4〕「悲劇の人物」としてのベアトリーチェ

D. キングヘリーが言っているように<sup>(22)</sup>、ベアトリーチェは、シエリーの以前の作品に見られるような典型的な英雄ではない。寧ろ、既に述べたことであるが、この悲劇の主題の基礎となっているものは、彼女が犯した「倫理的誤謬」である。振舞の点では、彼女は非難されているが、美しさ、純潔さの感覚の点では、彼女は称賛されるべき女性として描かれている。『序文』に次のように書かれている。「この若い娘は（中略）明らかに極めて優しく愛すべく、目に楽しく称賛されるべき姿の人であったが、必然の境遇と確信のために、このように無法にもその本性を挫かれたのである。」<sup>(23)</sup>

第一幕第一場の枢機官カミーローの言葉から察せられるように、ベアトリーチェは、『プロミッシュス解縛』の冒頭で主人公プロミッシュスがコーカサスの岩山に縛りつけられて身を切る永遠の試練に耐えているように、チェンチ伯によって「社交界から閉め出されて、／奇妙にも不当な虐待を受けている」のである（Ⅰ. i. 46-7）。この段階において、また、過去においても、ベアトリーチェの行動は極めて立派であり、すべての人々の称賛的であった。

「ベアトリーチェよ。

お前は、無邪気な乙女の優しい気持から、  
虫けら一匹踏み潰しもしなかったし、生きた  
草花一本傷つけなかったどころか、あわれに思って  
無用の涙をさえ流したものだ／美しい妹よ、  
そんな愛らしさと聡明さが、お前の中ではどうして互に  
矛盾しないのかと誰もがいぶかったものだった／」（Ⅲ. i. 365-71）

彼女は、父を道徳的に改心させることにも積極的であり、父の悪意を忍び、愛と涙も捧げ、父のために折りもし、法皇への嘆願もした。ベアトリーチェは、自己の過去を回想して語る。



「私は父の無法を許し、早急な断定を差控えて参りましたが、この不安定な気持が消えると、忍耐と愛情の涙で父の心を柔げようと努めました。これも甲斐がないと知ると、幾夜も幾夜も長い夜を寝ないで、万人の父なる神様に、熱情をこめてお祈りを捧げました。このお祈りもお聞き入れにならないと判っても、尚も耐え忍んで参りました。」 (I. iii. 114-20)

そして大宴会の場では、彼女は二人の兄たちの死の報告にも耐えねばならなかった。その夜遅くに、彼女は自制をして、父の魂の救済を求めて、神が憐みを垂れるよう一緒に祈ろうと父をうながしたが無駄であった (I. iii. 156-9)。折角の宴会を台なしにされ、加えて、出しやばった態度をとるベアトリーチェに腹をたてチェンチ伯は、遂に、その夜、「貴様を優しく穏やかにする魔法の秘儀」を執行する。

第二幕は、気も狂わんばかりに、また、すっかり気弱になったベアトリーチェの変身で始まる。「あの魔法の秘儀は心ゆくまで効目がある」ことが立証されたのである。継母ルクレチアは、直ちに、彼女の変化に気づいて悲しむ。「あなたのしっかりした精神だけが、わたしたちの守護神であり、よるべであるのに、／どうしてこんなに気弱くなったのでしょうか。」 (II. i. 48-50) その時、オルシーノーの召使が、法皇はベアトリーチェの嘆願書を拒絶したという偽りの報告をもって来た。ルクレチアは、「これで最後の望みの綱も切れましました」 (II. i. 28) と嘆く。ベアトリーチェの「わたしはただもうこれ以上争わない方がよいだろうと考えていましたの。」 (II. i. 54) という言葉は、伯爵が入って来たのを見て震えおのく彼女の弱くなった気持をよく表わしている。伯爵は彼女を屈服させたことを見てとり、満足し、その晩も魔法の秘儀を実行し、彼女の支配を完全なものにしようとする (II. i. 184-5)。

第三幕になると、ベアトリーチェは、父によって繰返しなされる「無法の侮辱」、「親不孝な／憎悪を燃えあがらせた程の非道な侮辱」 (IV. iv. 102-3)、「破滅、嘲笑、苦悩、絶望」 (V. iv. 71-2) によって精神錯乱に陥り、それからさめると、彼女は、遂に、何か不徳なことを決心する程に自分の精神の硬化を感じる。

「本当に、何か或る事を是非ともやり遂げねばなりません。それが何かは未だ判りませんが... 私がこうむった災難も、これに復讐する恐ろしい衝撃に較べてみると、ほんの影に過ぎないような何かを... 瞬間的で、迅速で、確定的で、救済不能のその結果に全く見限りをつけてしまうような或る何かを。何かそんなことを忍耐強く実行しなければなりません。」 (III. i. 86-92)

しかし、この段階では、或は、これ以前の段階でも、未だ、チェンチ伯暗殺の言葉は、伯爵自身の言葉 (II. i. 137-43) とオルシーノーの悪巧みの独白 (II. ii. 120-1) 以外には、他の誰の口からも語られていない。

ここで、我々は、シエリーの信念にとって、心の硬化は最も危険なものであったことを思い出すことが必要である。ベアトリーチェ自身も刺客マルツイーオーに言っているように、

「心が頑固なこと (a hard heart) は、流血の罪状 (a bloody hand) よりも悪いのです。」(V. ii. 133) 何故なら、心の硬化は、彼女を、「青春の楽しいこの時期に、馴染み深い唯一の世界から、／光明から、生命から、そして愛情から」追放してしまったからである (V. iv. 85-6)。彼女は、「忍耐力や尊敬の気持や悔恨の情や恐怖心など」を「すり切れた着物のように」捨ててしまったのであった (III. i. 208-9)。このようにして、彼女は真に墮落してしまった。「墮落しましたの、本当に／」(III. i. 381)

「真黒で

腐った濠気がわたしに纏りついて離れず、  
それが次第に周りを取りまいて来ます....  
それは実質を持っていて、重く、濃密で、  
指先や身体に絡みつき、筋肉に喰い入って  
肉体を腐ったものに変質させ、優美で、純潔な生命の  
最も秘密の精髓を腐らせるので、  
それをどうしても払いのけられないのです／」 (III. i. 16-23)

同様な考えは『詩の擁護論』にも述べられている。「社会的な腐敗は、結果として、あらゆる欲びに対する感受性を破壊せずにはおかぬ。」「腐敗は、しんから始まるように、想像力と知性に始まる。やがて麻痺させる毒のようにそれは一面に拡がり、情愛をへて欲情そのものに達し、遂には全心身は殆んど感覚のない鈍い肉塊となる。』<sup>(24)</sup>以後、彼女の行動の原則は、忍耐、後悔、心の平和、愛に代って、陰謀、収賄、共謀、嘔吐きとなった。

ベアトリーチェは過ったのである。プロミーシュースが忍耐のうちに知識を得て、憎悪と呪詛を棄て愛と平和でもって敵を滅ぼし、自らを解縛したのと全く対照的である。法皇の特使サヴェルラは、「異常な考えは異常な行為を生むもの。この事件にはその二つ共が含まれている。」(IV. iv. 139) と言っている。大宴会の席で、ベアトリーチェ自身、父に向って、「悪は悪から生まれるものです。」(I. iii. 151) と論している。ベアトリーチェの心の硬化、墮落は、オルシーノーの乗ずるところとなった (III. i. 172-7)。彼は、チェンチ伯殺害のために二人の刺客を雇い入れることを勧める (III. i. 233-6)。ベアトリーチェ伯は兄デアコーモーをもその一味に加えんとして語る。「一寸接吻して下さいませ。／そうすれば、あなたも彼(父)を殺すことに同意なさったと信じます。／... 神に対する敬虔や兄弟の愛情、／正義観や慈悲心、その他も強情な人間の心をささめ／和らげるすべてのものをして、あなたの心を頑なにさせなさいませ。／お兄さま。」(III. i. 385-90) 彼女の「心の平和」(V. ii. 125; III. ii. 54) はもはや取り返しのつかないものとなってしまった。

ベアトリーチェの心の硬化、憎悪と復讐心は、父チェンチ伯をして、更に、彼女に残酷な仕返しを企てさせることになった。彼のペトレラ城での目的は、彼女の身体をけがすことにとどまらず、「彼女の魂を毒し、腐らすこと」(IV. i. 44-5)、「彼女の頑固な意志」を屈服さすことであった (IV. i. 10, 76)。「その魂はわしの呪詛で膿みただれて／神の前に近づかせてやるのだ。わしはあいつの心身共に、／腐れ壞れた醜い塊にならせてやるのだ。」(IV. i. 93-5) チェンチ伯の復讐心は地獄の悪魔の歓喜の哄笑となって最高に達する。娘は、最悪の復讐心でもって、これに応えた (IV. i. 167)。チェンチ伯は催眠薬を飲まされ熟睡中を絞殺され、露台から投げ落され事故死と見せかけられた。その時、法皇の特使サヴェルラは、

夜道をおして、てチェンチの最も重大な罪状の申し開きのために、伯爵の逮捕にやって来た。ベアトリーチェが今少し忍耐したならば、彼女は無実であり、自由の身となれたであつたらう。事件の真相は直ちに露見して、陰謀者たちは逮捕された。気の弱い兄デアコーモの言葉には後悔の気持がみられるが（V. i. 1-11, 13-8）、ベアトリーチェの言葉にはその徴候すらみられない。「済んでしまったからには、／愚かな行為を今更歎くのは愚かさの上塗りですよ。」（V. iii. 111-2）それ所か、彼女は、法廷では、神に自分の無罪を偽り誓い（V. ii. 152）、刺客マルツイーオーにもこれを偽証させる（V. ii. 156-9）。そして、死刑執行令状を見た彼女は全く狂乱の体である。

## V

上述のように、シェリーが、自分の悲劇の概念と主題に基づいて、ベアトリーチェを「悲劇の人物」として「倫理的誤謬」を行わせようとすればする程、その誤謬は彼女の本性の単なる仮りの衣裳である所か、彼女の本性を墮落させ、腐らしてしまい、一般的な悲劇の概念から見れば、彼女は「悲劇の人物」からはほど遠い人物となってしまう。実際に、もしも、シェリーが彼女が過去においてその美しい容貌にふさわしい徳行の持主であったことを、時々登場人物に語らしめ、これを読者の心に印象づけることをしなかったならば、そして、劇の最後に見られる彼女の美しい言葉が省かれていたならば、彼女は真に墮落し、誰も同情出来ない人物となっていたであろう。「道徳的にすぐれた美しい理想主義」で「抒情劇」を描くのが得意だったシェリーも、「悲しい現実」を掘り下げて、「人間の心の最も暗黒秘密の奥底」<sup>(25)</sup>を明かす悲劇を書くには、概して、不得手であったと言わざるを得ない。彼は、世に行われている悪をじっと凝視するにはあまりにも純真であり、悪を非難し嫌悪するには性急であり過ぎた。

そして、シェリーは後年教訓詩を公然と拒絶し続けているけれども、逆に言って、このことは、そうしなければならぬ程に彼が教訓詩——特に倫理的目的をもったもの——に異常に深い関心をもっていたことを示している。T. S. エリオットも、シェリーの詩は、彼の使用した言葉の意味では正確には教訓詩とは言われないが、その詩は主として教訓詩だと主張している<sup>(26)</sup>。そして、シェリーは、彼の倫理的目的への執着の故に、彼の倫理観での悪に対する極端な嫌悪を悲劇の主題に基礎づけねばならなかった所に、ベアトリーチェという「悲劇の人物」の性格の公平なる展開のための困難さがあったと思われる。シェリーが、世評を無視して、『チェンチ家』を『プロミーシュース解縛』よりもすぐれた作品と決して考えなかったのは、自分の才能の領域を正しく認識していたがためではなかったであろうか。

（昭和41年8月4日 受理）

## 註

- (1) F. L. Jones, *The Letters of P. B. Shelley*, Oxford, 1964, ii, 102, 108, 178, 186, 190, 263, 290.
- (2) F. R. Leavis, *Revaluation*, London, 1st pub. 1936, 5th impression. 1959, 223-7.
- (3) Cf. E. E. Bostetter, *The Romantic Ventriloquists*, Seattle, 1963, 326-7.

- (4) Preface to *Prometheus Unbound*: T. Hutchinson, ed., *The Complete Poetical Works of P. B. Shelley*, London, 1952, 207.
- (5) May 29, 1819: Jones, *op. cit.*, ii, 96.
- (6) Hutchinson, *op. cit.*, 275.
- (7) Jones, *op. cit.*, ii, 190.
- (8) *Op. cit.*, ii, 150.
- (9) Hutchinson, *op. cit.*, 205.
- (10) C. Baker, *Shelley's Major Poetry*, Princeton, 1948, 141.
- (11) Hutchinson, *op. cit.*, 276.
- (12) Baker, *op. cit.*, 141-2.
- (13) Hutchinson, *op. cit.*, 278; cf. *A Defence of Poetry*: J. Shawcross, ed., *Shelley's Literary and Philosophical Criticism*, London, 1932, 130.
- (14) Jones, *op. cit.*, ii, 154.
- (15) E. Dowden, *The Life of P. B. Shelley*, London, 1886, ii, 278.
- (16) July 20, 1819: Jones, *op. cit.*, ii, 102; cf. Preface to *The Cenci*: Hutchinson, *op. cit.*, 277.
- (17) Hutchinson, *op. cit.*, 277.
- (18) *Op. cit.*, 275.
- (19) D. King-Hele, *Shelley: The Man and the Poet*, New York, 1960, 131.
- (20) Jones, *op. cit.*, ii, 219.
- (21) Baker, *op. cit.*, 152.
- (22) King-Hele, *op. cit.*, 132.
- (23) Hutchinson, *op. cit.*, 275.
- (24) Shawcross, *op. cit.*, 138.
- (25) Hutchinson, *op. cit.*, 276.
- (26) T. S. Eliot, *The Use of Poetry and the Use of Criticism*, London, 1933, 93.

### Summary

#### SHELLEY'S BEATRICE IN *THE CENCI*:

#### In Relation to His Concept of Tragedy

Norikane TAKAHASHI

Shelley's tragedy *The Cenci* (1819) has received various comments from many scholars of Shelley. In spite of malicious critics like F. R. Leavis in the *Revaluation* (1936) most of the critics have agreed that the drama is one of Shelley's greatest works, though "Shelley's intent in regard to Beatrice is baffling." (Bostetter, *The Romantic Ventriloquists*, 1963, 326-7) For those critics, who try to find a Promethean heroism in the character of the heroine, never fail to be baffled by discovering her betraying Marzio, her hired assassin in the fifth act, and they are at last forced to conclude that she is no tragic character at all, on the ground that on the part of Beatrice there is no sign of self-consciousness, of a sense of guilty or repentance, such as even Lady Macbeth reveals. The aim of this paper is to investigate the cause of such a discontent, to clarify Shelley's real intent in regard to Beatrice in relation to his concept of tragedy.

In so doing, first, I examined Shelley's concept of tragedy, and, then, I studied the characters of Pope and Count Cenci as the heroine's civil and domestic tyrants and impostors and that of Orsino as a degraded churchman, most of whose motives were determined by his unrequited love for the heroine. And, lastly, I turned to the character of Beatrice and the manner by which she behaved herself against these conditions imposed upon her.

I came to a conclusion that the difficulty of Shelley's treatment of the tragic subject might lie from the beginning in his essay to combine the contradicting elements in his morals and tragic ideas, that is, in the fact that in his morals hatred and vengeance was the worst of all evils or even a fountain from which the vast portion of all evils had gushed, yet that Shelley was compelled, by the necessity to make his heroine (whose sense of innocence and purity he never ceased to admire) "a tragic character", to make her resort to the most debased act like hatred and vengeance as the means of expiring the civil and domestic evils.